

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13306

研究課題名（和文）江戸期の刑罰的な切腹 諸藩での適用に関する法政文化史的研究

研究課題名（英文）Obligatory Seppuku during the Edo Period: A historico-cultural legal study of applications in different domains

研究代表者

Korneeva S (Korneeva, Svetlana)

帝京大学・文学部・准教授

研究者番号：30599494

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000 円

研究成果の概要（和文）：江戸時代の刑法では、切腹の適用資格について、御目見以上の武士に科されるのが原則であるが、実際は御目見以下でも切腹を科されることがあったと指摘されてきた（平松義郎）。切腹か斬首かについては、幕府の評議所で寛政元（1789）年11月に行われた協議によると、口論または酒狂で刃傷に及び相手が死亡した場合、口論または酒狂で起こされた刃傷を裁く際、侍以上であれば切腹、以下であれば下手人というように、身分の軽重が死刑の方法を分ける目安であった。しかし、江戸時代前期の諸藩における死刑適用の運営は必ずしも幕府の方針と一致していなかったことが今回の調査から明らかになり、分析の深化が今後の課題となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

武士身分であれば、人殺しのような重い罪に対する処罰は決まって切腹だったという今日の通念は必ずしも事実に対応していないことが諸藩の事例から明らかになった。例えば、江戸時代前期の加賀藩において、武士の罪と罰の位置付けについて、盗みや臆病といった武士に相応しくない行為は切腹ではなく打首にすべきと、罪の性質によって切腹と打首を区別していた。武士であっても、犯罪の規模や状況によっては打首に処されることが少なく、罪の重さを計り、死刑方法の中から適切なものをその都度選択していこうとする姿勢を確認することができた。

今後の課題として、地域と時代を少しずつ広げつつ、更なる事例収集とともに、比較検討をしていく。

研究成果の概要（英文）：Under the criminal law of the Edo period, seppuku was generally imposed on samurai of high rank (allowed an audience to Shogun), but in practice, seppuku was sometimes imposed on samurai of low rank. According to the record of a consultation held in November 1789 at the Bakufu council office, when a quarrel or violence under alcohol resulted in the death of the other party, the standard for determining whether to impose seppuku or geshunin (simple style of death penalty by decapitation, known as the penalty for murderers), was the rank of a guilty side: those who held samurai rank were allowed to be executed by seppuku. However, this study reveals that the application of the death penalty at the domains in the early Edo period was not always in line with the policy of the Bakufu, and further analysis is required in the future.

研究分野：法制史

キーワード：江戸時代の刑罰 死刑 切腹

1．研究開始当初の背景

切腹は自主的な側面（自死としての性格）と強制的な側面（刑罰）の両方を有した、通時的に長い歴史をもつ現象であり、研究史も蓄積している。

切腹の歴史をテーマとする著書としてよく知られ典拠されているのは大隈三好の『切腹の歴史』（1973 年）である。大隈は軍記をはじめとする数多くの史料に拠りながら、切腹の起源に遡って、その発達の歴史を時代毎に追ってゆき、三島事件を切腹の最後の事例として著書を締めくくる。切り方による切腹の分類、作法、具体的な切腹例が詳細に論じられているのがこの本の特徴であり、切腹の歴史的な総合研究というべきものであろう。近年刊行された大野敏明著の『切腹の日本史』（2013 年）についても、節目になっている諸事例を挙げつつ切腹を通時的に扱っている意味で概説的な研究といえる。

これまで、通時的なアプローチでなおかつ目立つ事例を取り上げる先行研究は主流であり、実態としての切腹刑に焦点を合わせた検討が少ないのは現状である。そこで、各藩での罪科の一つとしてどのような罪に対し切腹が科されたかに焦点を当てる必要があり、本研究をもって一助。

2．研究の目的

本研究は、日本の江戸時代に刑罰として適用された切腹に着目し、諸藩での適用のあり方を考察するものであり、切腹がどのような罪に対し課せられたかに着目し、事例の収集と分析をすることによって刑罰としての切腹を実証的に捉えることを目的としている。そのため、諸藩での罪科の一つとしてどのような罪に対し切腹が科されたかに焦点を当てる必要がある。

研究対象として、計画当初は東日本、西日本、中国に位置したいくつかの藩における切腹刑の運用に焦点を当て、藩内での運用すなわちどのような罪に対し切腹が下されたかを実証的に明らかにしていくことを目論んだ。この作業を通して、江戸時代の諸藩における切腹刑の実態を明らかにするとともに、打ち首など他の死刑の方法との差異という観点から刑罰としての切腹の一側面の解明を目指した。

3．研究の方法

江戸時代の東日本、西日本、中国に位置したいくつかの藩における切腹刑の運用に焦点を当て、藩内での運用すなわちどのような罪に対し切腹が下されたかを実証的に明らかにしていくため、具体的に以下の方法をとった。

- （１）藩法集等から士分に対する決まりを整理し、活字文献から情報収集、その整理を行う。
- （２）幕府および諸藩における切腹の位置づけを調べるため、国内の文書館・資料館で現地調査を実施した。

科研費初年度がコロナ禍の初年度に当たり、研究活動の始動から 2023 年冬までの間、コロナ禍の影響を強く受けた。とりわけ 2020 年度、2021 年度は出張の予定が立てにくく、現地の資料館などに資料調査に行くことが難しかった。2020 年度中は新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言の影響を受け、計画していた地方の資料館などでの現地調査について、1 館のみ実施することができた。その現地調査は、本研究が目的としている切腹刑の適用経過がわかる事件の具体的な記録を収集することができた。同じ事件に関する

記述を複数の資料から確認し、理解の深化に繋がった。得られた知見の一部を 2022 年度に発表した論文に部分的に活かすことができた。

現地調査ができない分、地方の刑罰記録を中心にすでに刊行された資料の存在を調べ、その入手に努めた。コロナ禍による行動制限が敷かれていた期間中、手持ちの資料の整理と平行し、複写依頼を中心に資料の収集に注力する状況が続いた。また、研究の遂行に必要な図書を揃え始め、環境整備を進めていった。研究活動が限定された中、収集できた資料の中にこれまで表に出てこなかった記録が見つかり、整理の手応えを掴んだ。

研究活動最終年に当たった 2022 年度は、前半は新型コロナウイルス感染の影響が出ており史料調査の計画が立てづらかったため、関連書籍の購入に加えて手持ちの資料の整理を行いデジタルアーカイブスの活用に専念した。2023 年 1 月以降に新型コロナウイルス感染状況が収束に向かう時期にて、元々計画していた地方の資料館で集中的に現地調査を実施し、一次史料を入手することができた。調査対象は、松江藩、盛岡南部藩、水戸藩の刑罰とりわけ武士の死刑関連の一次史料及び関連資料であり、有意義な記録を収集することができた。

4．研究成果

3 年間の成果をまとめると、刊行物及び口頭発表については、初年度に当たる 2020 年度はオンラインで開催された学会発表 2 件（ポスター発表 1 件、口頭報告 1 件）に加え、それぞれ資料紹介を 1 篇、研究論文を 1 編所属している大学の紀要に投稿した。

2021 年度は研究論文を 1 編所属している大学の紀要に投稿し、2022 年度は研究論文と研究ノートを 1 編ずつ、所属している学科の紀要と論集に投稿した。

江戸時代の死刑の中での切腹の位置付けを浮き彫りにするため、2022 年度に発表した「江戸時代前期の盛岡藩での自殺・斬首・切腹に関する一考察」という研究ノートにおいて、斬首（打首）と切腹が、江戸時代前期の盛岡藩ではどのような位置付けにあったかを浮き彫りにするため、加賀藩との比較を交えた。とりわけ喧嘩口論の結果によって相手が死亡した際、打首か切腹かを決める際の基準を、盛岡南部藩の『盛岡藩雑書』と『刑罪』を題材に江戸前期の盛岡藩の事例から考えた。

江戸時代前期の盛岡藩での切腹のやり方について、基本的な手続として、検使が派遣され、介錯人が任命されることが例外なく行われていることがわかった。また、武士であっても打首が言い渡される条件について、酒に酔った状態で人と口論し打首となったケースのように、純粋な喧嘩ではなく、加害者の罪を重くする要素が付随している場合に切腹ではなく、打首になる傾向が見られた。特に、相手に対する理不尽な態度や、度が過ぎた扱いに対し「仕置」や「成敗」が言い渡されるのである。ちょっとしたことでカッとなって（酩酊の状態では正常な判断がしにくいいため）相手を打擲して死なせるといった傷害致死罪は現代のみならず、当時においても厳重に罰せられたのである。このような罪を犯したら、武士であっても切腹は許し難いといった考えを確認することができた。

切腹と打首の違いについて加賀藩でも似たような傾向が見られることがわかった。ある武士の刑を決めるに当たって、元禄 4（1691）年に切腹か打首かについて議論が繰り広げられた。それによると、盗みをした場合、または遅れ（武士に相応しくない臆病的な行動や気後れ）を取った場合は切腹の適用範囲外である。他方、打首の適用範囲については「侍之覚悟にそむき候」といったような言動や行動がそれに該当するのである。つまり、故意に悪事を働いたり、虚言をしたりするようなことが厳しく罰せられ、為政者が切腹を与え

ずに打首などとすることによって罪を自覚させると同時に戒めることを目的としていたことが窺える。

武士身分であれば、人殺しのような重い罪に対する処罰は決まって切腹だったという今日の通念は必ずしも事実に対応していないことが盛岡藩を例に判明した。また、同時期の加賀藩においても、武士の罪と罰の位置付けについて、盗みや臆病、気後れといった武士に相応しくない行為は切腹ではなく打首にすべきと、罪の性質によって切腹と打首を区別していた。武士であっても、犯罪の規模や状況によっては打首に処されることが少なくなかった。裁く側は「武士の覚悟」に照らして罪の重さを計り、いくつかの死刑方法から適切なものをその都度選択していこうとする姿勢もみて。

今後の課題として、地域と時代を少しずつ広げつつ、更なる事例収集とともに、比較検討をしていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 コルネーエヴァ・スヴェトラナ	4. 巻 第53号
2. 論文標題 江戸時代における「乱心」の取り扱いに関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『帝京大学文学部紀要』日本文化学	6. 最初と最後の頁 55-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 コルネーエヴァ・スヴェトラナ	4. 巻 第52号
2. 論文標題 切腹刑の作法 『自刃録』の記述を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『帝京大学文学部紀要』日本文化学	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 コルネーエヴァ・スヴェトラナ	4. 巻 第52号
2. 論文標題 『切腹之切紙』 江戸時代の切腹故実書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『帝京大学文学部紀要』日本文化学	6. 最初と最後の頁 59-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 コルネーエヴァ・スヴェトラナ	4. 巻 29
2. 論文標題 江戸時代の刑罰的切腹用の装束について 故実書や刑罰記録を手がかりに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『帝京日本文化論集』	6. 最初と最後の頁 (23)178-(55)146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 コルネーエヴァ・スヴェトラーナ	4. 巻 54
2. 論文標題 江戸時代前期の盛岡藩での自殺・斬首・切腹に関する一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『帝京大学文学部紀要』日本文化学	6. 最初と最後の頁 47 75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 コルネーエヴァ・スヴェトラーナ
2. 発表標題 刑罰的な切腹における名誉と恥辱 江戸時代の切腹故実書を手がかりにー
3. 学会等名 日本社会学会第93回大会（松山大学）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 コルネーエヴァ・スヴェトラーナ
2. 発表標題 刑罰的切腹時の死装束の色 「浅葱」と「浅黄」の表記を中心として
3. 学会等名 服飾文化学会第21回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織			
	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------